



大學生活之回顧與校友會現況

原著◎許嘉堯（台南市校友會理事長）

翻譯◎彭添松

「人的一生如負重擔行遠路、莫躁急」，這是日本德川幕府的開創人德川家康遺訓中的一句話。遠路有平坦者亦有凹凸不平而險惡者。回顧我的大學生活則屬於後者，為凹凸不平的路程。

懷著未來成為日本職業軍人（將軍）的夢想，我於十五歲那年春天赴日，入學於陸軍幼年學校。不過，歷經東京大空襲、大戰結束、食物匱乏等磨練，終於又退回台灣，那已是戰後兩年的事了。那時台灣學制已完全改變，我雖曾畢業於舊制中學，但只被認定高級中學第一學年肄業的資格，遑論大學入學考的資格。正在左右兩難徬徨之際，幸而台南市省立第二中學復校，我通過了高二插班考試，最後終於修得高級中學畢業的資格。

當年教育部舉辦「國內著名大學的升學」考試，我踴躍應考而很幸運地被錄取，就讀上海國立同濟大學的醫學院。然而時運不濟，適逢國共內戰正酣，乃被教育部強制遣返台灣，分派至國立台灣大學「寄讀」。所謂寄讀即由於戰亂，學校遭封閉的學生由教育部安頓到較安全的後方大學選課，俟復校時所修得學分被承認的措施而言。只是，鑒於國軍的敗退，斷絕了同濟大學的復校美夢；我只好努力參加轉學考試以取得台大學籍之一途。

本來應可順理成章地學業生涯，我被捲入有名的搜捕師院、台大學生的「四六事件」，真如俗稱「好事多磨」，我遭當時的保安司令部拘留了十天，才脫離嫌疑而無事釋放。不過卻面臨功課延誤的壓力，惟恐通過不了轉學考試，只有日夜匪懈用功。總算皇天不負苦心人，結果獲得台大的入學許可。

當時新任校長傅斯年博士，正致力於學校的興革，其中最引人注目的是將原來醫科的修業年限由六年制改成七年制一案。影響所及，剛獲得轉學許可的數位轉學生，被學校當局編入七年制的第一屆學生，因此只好面臨大學生活的再出發了。如此這般，我們比同班同學年長兩歲，乃被尊重為老大，其後的五年均擔任班代表了。七年制的醫科為把原先的醫學教育從根本改組，最初兩年稱為醫預科，隸屬於理學院。因立場非常微妙，在理學院得到如繼子般待遇，學科毫無新鮮感，彷彿複習高級中學課程一般，我們戲稱為高四、高五。這兩年可說是在人生中最大的浪費。

轉入醫學院本科後，功課負擔倍增，無論如何用功總覺得時間不夠。如此用功修完六年，最後第七年的一年為非一般上課而是擔任見習醫生，就在大學醫院



裏湊熱鬧。雖然未具有醫生資格的小伙子披上白衣裳，在醫院內大搖大擺的模樣，成為醫師及病患們取笑的對象。但是回首吟味一年的見習醫生活，在整個醫師生涯中最具有價值的一年吧。離開大學後如下棋布局般，依例服

役預備軍官，退役後再回到大學醫院，選擇專科磨練醫術一段時間終於成為可獨當一面的醫師，服務社會人群了。

畢業後數年，在台南市也發起成立「台大校友會」，我也受邀參加。當初所謂「校友會」仍雜亂無章，會員寥寥可數。可能大家因職務關係在此地長久定居不易，招募會員令人相當煩惱。幸好以法學院與醫學院的畢業生為主軸，雖然會員仍少也發揮些作用，總算鞏固了「校友會」的基礎。由於法學院與醫學院的校友佔居大半，自然會長也就由此兩學院校友中選出了。甚至，大家建立了會長由法學院與醫學院校友輪流擔任的共識。

我當時出任台南市醫師公會理事長時，下一屆的會長選舉承蒙理監事的協助下，擔任校友會會長。最初的工作目標是如何邀集更多會員。經大家研商結果，首先編造會員名冊。法學院校友拜託地方法院及律師公會，醫學院校友請醫師公會、牙醫公會、藥師公會、護理公會、醫檢師公會等提供名單。其他學院畢業生則依賴本市大企業團體及各機關調查提供。法醫兩學院校友名單勉強達到所定目標，其他學院校友名單則未能得到如期效果。總而言之，校友名冊的「初版」總算完成，不過可能仍有三分之一校友名單遺漏吧。今後希望加強橫向聯繫，邁向完整的名冊而努力。

校友會尚有一大難題就是經費的匱乏。雖然增加會員可多募些經費，但無論如何努力就是不易招募會員，徒呼奈何！究其原因可能過去校友會替會員服務太少有關吧。結果侷限於理監事有限的捐款而無法施展業務。尚待各位提供良策，真是應了「心有餘而力不足」格言，這就是我們的處境。尚祈大家不吝指導與協助，就此擱筆。⊕（譯者為農工系校友）



大学生生活の回顧と校友会の現況

◎許嘉堯（台南市台大校友会会長）

「人の一生は重荷を背負いて遠き道に行くが如し、急ぐべからず」この言葉は日本の徳川幕府の創設者徳川家康公の遺訓の一節である。遠き道には平坦なものあり、凸凹不平且険悪なものもある。思い起せば私の大学生生活は後者に属し、凸凹不平の道程であった。

十五歳の春、日本国の職業軍人（将軍）を夢見て訪日し陸軍幼年学校に入学したが、東京大空襲、終戦、食糧難等々の試練を経て、台湾に逆もどりして来たのは既に終戦後二年目であった。台湾の学制はすっかり改められ、旧制中学を卒業した私には、高級中学第一学年を修るした資格しか得られなかった。勿論大学入試の資格は無く、右往左往するのみでした、幸ひ台南市の省立第二中学が復校し、やっとの事で高二の編入試験にパスし無事高級中学修るの資格をとった。時あたかも教育部に「升学国内有名大学」の募集があり、勇んで応募した。結果は幸運にも採用され、上海の国立同済大学の医学院に進学した、然し天我に味方せず、国共内戦のあほりで教育部から強制的に台湾に帰され、国立台湾大学に「寄読」を許された。「寄読」とは戦乱で学校の閉鎖にあった学生を教育部が後方の安全な大学に学生の收容を命じその大学での授業を受け、そこで取得した単位（学分）は承認され、復学可能の場合は、此等の学課の再取得を免除される仕組みであった。結局国民党軍の敗退で同済大学の復校の夢は絶ざされた、ならば転学試験を受け、台大学の学籍を取る道しか残されて居らず、それに向って努力を惜しまなかった。然し好事魔多しの諺の通り、スムーズに行はれる筈の学業が師院、台大学のあの有名な学生狩りの「四六事件」に巻きこまれ、当時の保安司令部に拘留された。からうじて嫌疑は晴れ、約十日間の扣留で無事釈放されたが、そこに待って居たのは授業の遅れであった。この調子、たと転学試験にパスするのは難し、判断し、日夜を徹して勉強にいそしんだ。その甲斐あってやっとの事で台大学の入学が許可された。当時は傅斯年博士の校長着任と同時に色々と学校の改革に乗り出し、中でも最も且を引いたのが、今迄の医科の修業年限を六年制から七年制に改められた事でした。折角転学を許可されはしたが、学校の命令で私達数人の転学生は七年制の第一期に組みこまれ、二で再び大学生生活の再出発を余儀な

くされた。二の爲同期の皆きんより二ツも年をとってしまい級ではお兄さんとして可愛いがられ、其の後五年次迄級代表を務める事になる。七年制の医科は今迄の医学教育を根本的に組みかえたもので、最初の二年間は医預料と呼ばれ、理学院に所属された、立場的に非常に微妙な爲、理学院からは継子扱いにされた。学課に至っては全く新鮮味がなく、さながら高級中学の課程の復習であった爲、我々はこれを高四、高五と名付けた。この年間は人生にとって最大のロスであった。

医学院の本科に進んでから授業の重みは倍増し、幾ら頑張っても時間が足らなかった。六年次迄この様な仕組みでしたが、最後の年の七年次からは学課の授業がなく研習医（インターン）として大学病院を廻はした。医師資格を持たない若僧が白衣に身をかため、病院内をウロウロしてる様は医局を始め、患者さんの爆笑の対象になったのは言ふ迄もなかった。然しふり返って考える時、一年のインターン生活は医師として生涯を通じ、最も価値ある一年であった、大学を離れてから定石通り預備軍官として服役し、退役後は再び大学病院にもどり、それぞれ所望の科に入局し、腕をみがき、やっとのことで一人前の医者として社会に飛び立ったのである。

卒業して数年、台南市にも「台大校友会」の発足を見た。すめられて参加はしたものの、「校友会」と言っても一つもまとまりが無く、メンバーは微々たるものでした。各々の職務の関係上、この地に永住する事が難しかった爲メンバー集めには相当悩まされた。幸い、法学院と医学院の卒業生を軸としたメンバー集めは僅かながらもその効力を発揮出来、「校友会」の礎が成立した。卒業生が法学院、医学院卒の方々が大半をしめた爲必然的にこの双ツの学院卒の中から会長を選ぶ様にした。然も法学院卒と医学院卒の方で相互して会長を務めるアグリメント迄出来上った。当時台南市医師公会の理事長をつとめて居た関係上、次期の会長選には理監事の方々の御協力で「校友会」の会長を務める事になった。最初の目標は如何にしてメンバーを集める事にある。相談の結果、先づ会員名簿の作成に乗り出した。法学院卒は地方法院律師公会にお願いし、医学院卒は医師公会、牙医師公会、薬師公会、護理師公会、医検師公会等をお願いした。他の学院卒も本（文轉下頁）